

# biblatex-japanese パッケージ

前田一貴<sup>†</sup>

2016 年 1 月 6 日

## 目次

|   |            |   |
|---|------------|---|
| 1 | はじめに       | 1 |
| 2 | 使い方        | 2 |
| 3 | 開発者向けマクロ解説 | 2 |

## 1 はじめに

$\text{\LaTeX}$  においては文献引用の煩雑な作業の効率化のために  $\text{Bib}\text{\TeX}$  がよく用いられている。 $\text{Bib}\text{\TeX}$  を使うと、文献データベースを作成しておき、本文中の引用が必要な箇所に `\cite` コマンドを書くだけで自動的に、指定したスタイルでソートされた文献リストが指定箇所に、ソート後の文献番号が本文中の引用箇所に出力される。 $\text{Bib}\text{\TeX}$  は特に参考文献が膨大な数に及ぶ書籍や論文の執筆には欠かせない機構であるが、文献リストのスタイルを指定する `.bst` ファイルの作成には独自言語<sup>\*1</sup>を用いなければならず、指定された様式に沿う `.bst` ファイルが用意されていない場合には門外漢には利用が困難であるという問題があった。

この困難の緩和を目的の一つとして、近年になって `biblatex`<sup>\*2</sup> というパッケージが開発されている。`biblatex` は文献のソートに `biber` と呼ばれる Perl スクリプトを用いる以外は全て  $\text{\TeX}$  のマクロで記述されており、カスタマイズが ( $\text{Bib}\text{\TeX}$  に比べると) 容易になっている。また `biblatex` では、従来は別のパッケージで提供されていた、脚注への文献情報の出力や章毎の文献リストの出力といった、人文系で要求されることの多い機能が充実しており<sup>\*3</sup>、欧米の人文系学界では  $\text{Bib}\text{\TeX}$  に代わるものとして普及が進んでいるとされている<sup>\*4</sup>。しかし、`biblatex` では和文における利用は現状全く考慮されていないため、日本国内では需要があるにも関わらずあまり活用されていないようである。需要に対して供給がない理由は、日本の  $\text{\LaTeX}$  利用者の多くが理科系の人間であり、理科系においては論文といえば多くが英文によるものであること、理科系の和文論文を書く場合にも  $\text{Bib}\text{\TeX}$  の機能で事足りてしまうといったことがあると考えられる。

そこで、こうした問題に対処するために、`biblatex-japanese` というパッケージを作るプロジェクトを立

---

<sup>†</sup> Email: kmaeda@kmaeda.net

<sup>\*1</sup> PostScript と同様の postfix stack-based programming language, いわゆる逆ポーランド記法に基づいた言語であり、不慣れな者には扱い難い。

<sup>\*2</sup> <https://github.com/plk/biblatex>

<sup>\*3</sup> おそらく `.bst` が云々よりもこちらが移行する理由としては大きいと思われる。

<sup>\*4</sup> 本当かどうかはちゃんと調べていないので知らない。

ち上げることにした。「パッケージを作る」とは書いたが、立ち上げ時点では着地点がどこになるかはまだ定かではない。biblatex を使わなくとも Bib<sub>T</sub><sub>E</sub>X で問題を解決することも可能であるという話もある<sup>\*5</sup>ので、そうしたノウハウを集めて形にするといったことも目標として考えられる。いずれにせよ、これを書いている人（前田）自身は理科系の人間であるため、具体的にどういう要望があるのかを集約することが喫緊の課題であると考えている。

おぼろげながら考えているロードマップ（と呼べるほどのものではないが）は以下のようなものである。

1. GitHub の Issue 機能などを用いて要望を集める。
2. コードを書いて要望を実現する。ベースとしては biblatex や biblatex-chicago を用い、和文での文献引用における様々なニーズに柔軟に対応できるようなフレームワークを用意することを目指す。
3. 成果物は CTAN にアップロードし、T<sub>E</sub>X Live をインストールするだけで利用可能にする。

## 2 使い方

biblatex-japanese 一式を TEXMF ツリーの適切な場所に配置したうえで、プリアンプルに次を入れる：

```
\usepackage[backend=biber]{biblatex-japanese}
```

これで日本語用の設定ファイルが読み込まれる。biblatex に渡したいオプションは biblatex-japanese に渡せばよい。例えば、引用時の番号をソートしたければ

```
\usepackage[backend=biber,sortcites=true]{biblatex-japanese}
```

のようにする。

biblatex-chicago を読み込みたいときは

```
\usepackage[backend=biber,chicago]{biblatex-japanese}
```

と chicago オプションをつける。このときは、biblatex-chicago に渡すオプションも通るようになる。

■**注意** まだまだ開発は始めたばかりのため、とても実用に耐えるものではない。気長に待っていただければ幸いである。

## 3 開発者向けマクロ解説

biblatex-japanese では、日本語対応ファイルの開発に用いるマクロを biblatex-japanese.def というファイルの中に記述している。なお、以下に説明するマクロの名前・文法・仕様はまだ流動的であり、今後のバージョンで変更がある可能性が高いので注意を要する。

```
\DeclareJapaneseCommand{<command>}{<code for Japanese>}
```

<command> が文献出力処理中に現れたとき、もしその文献の langid が japanese ならば <code for Japanese> に置き換わり、そうでなければ元々のコマンドになる。

ただし、「langid が japanese」という条件はあまり筋がよくないと思うので、そのうち変更される可能

---

<sup>\*5</sup> <https://twitter.com/munepixyz/status/663199507392237568>

性がある.

`\DeclareJapaneseBibmacro{ $\langle name \rangle$ }{ $\langle code for Japanese \rangle$ }`

`\DeclareJapaneseNameFormat[ $\langle entrytype, ... \rangle$ ]{ $\langle format \rangle$ }{ $\langle code for Japanese \rangle$ }`

それぞれ`\DeclareJapaneseCommand` の `bibmacro`, `name list format` に対応するもの.